

★ 特集：煉瓦デザインの魅力を建築意匠で活かす ★

インタビュー

良い建築をつくりたい、行き着いたのが煉瓦

大宇根建築設計事務所 登録建築家 大宇根 弘司 氏に聞く

煉瓦建築を実現するために最も重要なことは、施主に煉瓦の魅力を理解してもらうことだ。大宇根建築設計事務所の登録建築家・大宇根弘司さんはこれまで数多くの煉瓦建築作品を残してきた。

本稿では施主に煉瓦の魅力を理解してもらうポイント、設計の立場から考える煉瓦の魅力と今後の展望などについてお話を伺った。
(編集部)

煉瓦の機能性を理解してもらう

——煉瓦建築に携わるようになった経緯を教えてください

大学を卒業した1965年に前川國男先生の事務所に入りました。ご承知の通り、先生はル・コルビュジエの元で学び、モダニズム建築の旗手として戦後の建築界をリードしていました。私が事務所に入った当時は、大型の現場打ち込みタイルというものを開発されていて、新宿の紀伊國屋書店ビル、埼玉県の県立博物館、同じく埼玉会館といった建物で評価を得ていました。先生は、日本の特技として焼き物がある。その特技を建築に活かすべきだと仰っていました。先生のところでは色々な経験をさせて頂きましたが、大きな転機となったのは山梨県立美術館をチーフとして担当させて頂いたときです。

この現場も当初は大型の現場打ち込みタイルを採用するようとの指示でした。ところが同工法を採用した他の現場で台風の際に雨漏りが起きたという話を上司から聞いたのです。万が一、美術品に被害が出るようならば大変です。そこで、かつて事務所が設計を担当した物件を調べてみると、東京海上ビルディング本館、神奈川県立音楽堂といった物件でコンクリート躯体にプレキャストを取り付けた設計がなされていました。このプレキャスト工法でタイルを打ち込めば雨漏りしても建物内部にまで浸透しないのではないかと考えたのです。問題はコストでしたが、それも設計の工夫をするなどして、前川事務所御用達のプレキャスト屋



▲「建物の機能性を考え、長く使っていくことを考えれば、煉瓦という選択肢は最も賢明なものだと思います」と語る大宇根氏



▲名所松島を望む高台にある東京エレクトロン松島クラブは、空と海に映える白色の煉瓦が印象的



▲構想を重ねて採用した煉瓦の松島クラブ